



Title	「純粹資本主義」論への覚え書:拙著への伊藤誠氏の批評に対して
Author(s)	降旗, 節雄
Citation	北海道大學 經濟學研究, 16(3), 55-78
Issue Date	1966-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/31152
Type	bulletin (article)
File Information	16(3)_P55-78.pdf



[Instructions for use](#)

「純粋資本主義」論への覚え書

— 拙著への伊藤誠氏の批評に対して —

降 旗 節 雄

伊藤誠氏が拙著『資本論体系の研究』（青木書店、1965）に対する書評を書いておられます。（『経済学論集』第32巻第2号所収）くわしく内容を紹介され問題点を指摘されつつ批判していただいたことは感謝にたえません。しかし氏の私への批判には納得しがたい内容がふくまれているとともに、この書評をとおしてうかがわれる氏の資本主義や経済学に対してもっておられる見解にも同意しがたいものがあります。以下順をおってそれらの点について のべてみたいと思います。

1

まず氏は宇野弘蔵教授の『経済原論』に対して疑問や批判を寄せる立場には三つあるとして、第一に、いわゆる「純粋な資本主義社会」を前提とする立場、第二に、「原理論も、純粋資本主義ではなく、資本主義の世界史的展開過程そのものを対象として、その基本的運動原理を抽出することにより構成される」とする見地、第三に、「従来の通説的マルクス解釈」にしたがったものにかけて、私を第一の立場にたって、第二、第三のそれを批判したものとされています。この第一の立場と第三の立場とは、それぞれマルクス自身の所説のなかにふくまれていた一面を継承しつつ主張するものとして、その存在理由はわかるのですが、第二の立場なるものはそのような意味ではたして学問的検討にたえうるものであるかどうか、私には疑わしいのですが、その点はあとでふれます。とにかく氏は、第一の立場に立つ私の『研究』の全展開をとおして特徴とされるのは、「流通形態論の純化」という点であ

って、これが『資本論』全三巻の諸問題を解決してゆくうえで「きわめて重要な意義」をもっていた。この点からする私の第三の立場に対する批判は「説得力」とんでいる、といわれます。

しかし第二の立場に対する批判には問題がのこっているとして、次のようにいわれるのです。「もちろん、著者の強調するように、他の社会関係なり上部構造との関連のもとに進展する『複雑な歴史過程』を具体的に解明する段階論的考察と、原理論とが研究の次元をことにすることは重要である。また原理論の展開は、資本主義の生成、発展、成熟の三段階を、それぞれおなじようなみで基礎としうるものではありえない。だがそうとしても、原理的展開が、はたして、商品経済と資本主義的生産の世界史的な存在の順序なり、資本主義的生産の世界史的発展、成熟の過程を考慮することなく、歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義のみを対象として、無理なく体系的におこなわれうるかどうか、また、それによって、理論的規定のいみするものが不明確となるおそれがないかどうかは、なお問題としてのこるであろう。」

これが伊藤氏のこの書評で主張されている核心的部分なので、少し注意して検討しておきましょう。こまかいことですが、氏はここで資本主義の発展段階を、「生成、発展、成熟の三段階」としておられます。通説的にはレーニンのいわゆる「発生、生成および消滅」あるいは「没落」がとられ、宇野教授やそれにしたがう私たちは「発生」、「成長」、「爛熟」といっています。つまり通説や私たちは、帝国主義段階を資本主義の没落過程あるいは爛熟過程ととるのに対して、氏は「成熟」過程ととるのです。もっとわかりやすくいえば、氏にあっては十九世紀中葉までの資本主義の発展は、なお未「成熟」な段階にとどまるというわけです。これはたんなる言葉のアゲ足とりではない。この帝国主義段階＝資本主義の成熟期説は、のちにみるように氏の主張の基礎をささえる道具だてとなっているのです。それにしても一体氏は、「資本主義の生成、発展、成熟の三段階」といわれるとき、何を基準に「生成」といわれ、「成熟」といわれるのか。「十九世紀末の『大不況』をつう

ずる資本主義の世界史的成熟過程」という氏の発言からすれば、いわゆる帝国主義段階への移行過程を、資本主義の「成熟」過程だとされておられるようですが、そうとすればそれ以上の、たとえば集中独占期とされる二十世紀初頭は、さらに大戦間あるいは第二次大戦後は、一体どういう過程とされるのか。資本主義がますます「成熟」してきた過程とでもいわれるのでしょうか。あるいはここにおいてはじめて「没落」とか「消滅」の過程をみるのでしょうか。そうすると氏の原理論は何故資本主義の「生成、発展、成熟」の過程を「考慮」するだけで、それ以後の過程は「考慮」しないのか。資本主義の歴史過程を「成熟」にとどめて、何故それ以上追求されようとならないのか。いろいろな疑問がおこってきます。これもじつは、また後でふれますが、氏の見解では、資本主義の「生成」とか「成熟」とかいわれるとき、何を基準にしてそういうのかが、氏自身によくわかっていないためではないか、と思われまふ。結論から申しまふ。私たちが資本主義の基本的な歴史過程を三段階にわけ、「発生、成長、爛熟」というとき、その区分基準を価値法則にとっています。つまり価値法則による経済的運動の規制がその根拠をえて、社会関係に対するこの法則的規制がより純化しつつ拡大していく過程を資本主義の「成長」過程とし、そのような根拠をうるまでの発展過程と、生産力の発展にともなつてこのような価値法則の純粹な展開が維持されえなくなった過程とを、それぞれ資本主義の「発生」ないし「爛熟」の過程としているわけです。ただ帝国主義段階を資本主義の「没落」期とみるか、「爛熟」期とみるかは、それ自体としては、重要な差異をふくんでいると思いますが、今はこれを問わないでおきまふ。いずれにしてもこの見方においては、帝国主義段階は、資本主義のノーマルな発展段階を経過した終末段階をなすのであつて、けつして資本主義はここで「成熟」したわけではないという認識では一致しています。ノーマルな発展段階とは何か、と反問されるかもしれませんが、ここでは、資本主義的生産様式における生産力と生産関係の矛盾が、完全に経済過程において解決されつつ発展してゆく段階であり、したがつて国内的にも國際的にも自由主義政策のもとに資本の自由競

争が保証され、価値法則が現実の社会関係に対する直接的規制を拡大しつつある段階とっておきましょう。私たちはこの段階をこそ、資本主義の成熟期とみるのです。それをすぎるから次の段階が爛熟期ないし没落期といわれるのです。とにかくここでは、帝国主義段階を資本主義の「成熟」期とすることは、自由主義段階までを未「成熟」な段階とすることによって、通説的にいつても、宇野教授にしたがう私たちからみても、とうていとりえない規定であるということだけをのべて先に進みましょう。

氏は「原理論の展開は、資本主義の生成、発展、成熟の三段階を、それぞれおなじような意味で基礎としうるものではありえない」ことを容認されたいうえで、「だがそうとしても、原理的展開が、はたして、商品経済と資本主義的生産の世界史的存在の順序なり、資本主義的生産の世界史的發展、成熟の過程を考慮することなく、歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋な資本主義のみを対象として、無理なく体系的におこなわれうるかどうか」は「なお問題がのこる」といいます。しかし誰が一体「資本主義的生産の世界史的發展」の「過程を考慮することなく、歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義のみを対象として」とりあげたのでしょうか。宇野教授にしる、私たちにしる、資本主義の歴史的発展を「顧慮することなく」原理論を構成しうるなどは考えたこともなく、いったこともありません。「歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義」などという奇怪なシロモノにいたっては私もついぞおめにかかったことがありません。大体「歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義」という言葉が正常な言語感覚の所有者に理解しうるとは思われません。「あらかじめ」というからには「歴史過程」の存在する以前に、それとはかかわりなしにということかと思えば、その存在しないはずの「歴史過程」「から」「抽出」したのものによって「純粋資本主義」が「想定されている」という。それでは「資本主義的生産の世界史的發展」を「考慮」してそこから「抽出」しているのであり、「あらかじめ」ではなく「歴史過程」を前提にしてというべきでしょう。他人の「理論的規定のいみするものが不明確となるおそれがないかど

うか」御心配なさる前に、まず自分の文章、したがって思考内容の論理的に「いみするものが」「明確」かどうか、まず反省する必要があるようです。

それはともかく、経済学の原理は、資本主義の歴史的発展過程を対象として、この歴史的発展自体のもつ純化傾向を基礎として形成される以外にないものであること——これが宇野教授のくりかえしとされる方法論の核心をなすものであり、かつ私が『研究』で不細工なりに主張しようとした点だったので。原理論を展開するためには「商品経済と資本主義的生産の世界史的な存在の順序なり、資本主義的生産の世界史的発展、成熟の過程を考慮する」必要があるのはいうまでもない。しかしこれを「考慮する」ということは、伊藤氏にあっても、原理論の展開のうちに、この「過程」をそのまま反映せしめることを意味するのではないでしょう。「考慮」しつつ原理的規定として「抽出」されるものと捨象されるものとがあるはずで。問題はこの「抽出」ないし捨象の基準は何か、という点にあるのです。

資本主義的生産様式が商品経済以外の何ものにも依存せず自己自身を発展させてゆく場合の規制原理——価値法則こそかかる唯一の基準なのです。流通形態論とは、価値法則が機能しうる商品経済的機構を論理的に展開するものであり、生産過程論とは、価値法則の根拠をしめすものであり、分配関係論とは、価値法則の具体的な貫徹の様式をあきらかにするものであり、この三つの領域によって価値法則はあますところなく把握されて、資本主義の原理的解明は完全になしとげられることになる——少なくとも私はそう考えています。資本主義の爛熟期としての帝国主義段階は、かかる価値法則の解明にさいして、「顧慮」されたうえで捨象される。何故ならそれは価値法則の理論的把握にとって何らプラスするものはないから。マルクスはその時代的制約のゆえに、かかる段階を「顧慮」することなく理論を構成した。私たちは「顧慮」したうえで捨象する。その点は確かに違うといえば違うのですが、それによってかえって、資本主義の爛熟段階を問題とせず資本主義の原理的体系をしめした『資本論』の基本的な科学的正当性を、確証したことになると考えるのです。

こういう私たちにとって「歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義」などというものはおよそ無縁であり、あくまで歴史過程を対象として、しかも歴史過程をとおして——といっても歴史過程ならどんな過程でもとりあげなくてはならぬというような無方法なものではなく、あくまで資本主義的生産様式の純化過程としての歴史過程なのですが——、「抽出想定された純粋資本主義」のみが対象とされていることは、おわかりいただけたと思いますが、伊藤氏は、このような純粋資本主義では「原理的展開がはたして……無理なく体系的におこなわれうるか、どうか、またそれによって理論的規定のいみするものが不明確となるおそれがないかどうかはなお問題としてのこる。」と危惧しておられます。私は純粋資本主義ではなく、不純な資本主義を対象とする場合にこそ、氏はかかる危惧をいだかれた方が自然ではなかったかと思うのですが、しかしやはり氏にとってそれが「問題としてのこる」以上、この氏の危惧はといておいた方が親切というものでしょう。次にそれを扱います。

2

「たとえば商品、貨幣、資本の形態論の展開のうちに、純粋資本主義を前提し対象とするということが、どのような積極的規定としてあらわれるのかは、本書においても、かならずしもあきらかではない」と氏はいわれます。「本書において」「かならずしもあきらかではない」にしても——私は「かならずしも」そうは考えませんが——、宇野教授の原理論関係の一連の労作を念頭においていただければ、そこでは商品形態や貨幣の機能は、純粋資本主義を前提とし対象とすることなくして理論的に把握しえないという主張が主題の一つとなっていることは、伊藤氏といえども御存知のことと思います。ともすれば価値形態論を物々交換の発展過程として、矮小化された商品経済史的発展において理解しようとする通俗的傾向に対して、それを純粋な流通形態の理論的展開として規定したことは、宇野教授の大きな功績の一つですが、その場合、かかる商品形態を、発展した資本主義における商品の抽象的把

握とする考え方——つまり、商品を純粋な商品形態として把握としようとするれば、発展した資本主義的商品を前提としてそこから形態規定を抽出する以外にはありえないという考え方が、この教授の主張の方法的基礎となっています。念のため拙著にも引用させていただいた宇野教授のいわゆる冒頭の商品にかんする規定を、煩をいとわず再引用しておきましょう。「それは勿論いわゆる単純なる商品の如き具体性を有するものではない。実際また単純なる商品は先にも述べたように、決して資本家的商品の如き全面的な交換関係を有するものでもなければ、また生産自身を社会的に商品生産として規制するものでもない。したがって資本家的商品から商品自身の規定だけを抽出したとしても、それは決して資本家的生産以前のいわゆる単純なる商品となるわけではない。歴史的には依然として資本家的生産関係に規定せられた商品であって、単にその資本家的関係から抽象され、或いはまた進んで貨幣形態自体からも抽象されたものに過ぎない。したがってまたあらゆる社会形態からも遊離したというような商品形態ではなく、むしろ資本主義的生産関係の中心基軸とでもいうべきものを表示するものとしてあるわけである。」

宇野教授の流通形態論が、いわゆる単純商品説への徹底的批判のうえに形成されたものであることが、これでおわかりいただけたと思いますが、このことはまた「流通滲透視角」論者の主張するように、資本主義の発生過程は世界商業ないし世界市場の拡大過程だったから、原理論においてもまず商品、貨幣の流通形態をあきらかにしなければならぬといった、安直な歴史と論理の対応の主張をも排除するものなのです。原理論の流通形態論であつかう商品は「あらゆる社会形態から遊離したというような商品形態ではなく、むしろ資本主義的生産関係の中心基軸とでもいうべきものを表示するものとしてある」というのが、宇野教授の主張の基本部分であり、私もこの点をくどくどとくりかえしたのですが、ついに伊藤氏には、このことが、つまり流通形態論において「純粋の資本主義を前提とすることが、どのような積極的規定としてあらわれるのかは……かならずしも」わかっていただけなかったようです。

「純粹の資本主義社会を前提」として、「資本家的生産關係に規定せられた商品」を把握し、しかもこれを「資本家的關係から抽象し、或いはまた進んで貨幣形態自身からも抽象」する以外に、商品形態の原理的把握はなしえないとするのが、宇野教授の、したがってまた私たちの方法的主張の出発点をなすものですが、この点さえも「あきらかではない」と考えられるならば、氏はみづからの論理をもって、資本主義の「生成」期を対象として、つまり「純粹の資本主義を前提」することなく、商品形態の理論的把握の方法を提示していただきたい。それさえもなしえないのでは、「原理論も、純粹の資本主義ではなく、資本主義の世界史的展開過程そのものを対象として、その基本的運動原理を抽出することにより構成される」などという鬼面ひとをおどろかす揚言も、たんなるハッタリの類いに墮すものでしかないでしょう。じつさい、伊藤氏も基本的に同意をしめされていると推測される、この第二の立場に立つ人びとの誰一人として、資本主義の「生成」期を対象として、純粹な流通形態の展開をあきらかにするという課題にこたえられた方はおられないようです。たかだか岩田弘氏が「世界市場によるヨーロッパ諸国の旧社会關係の分解過程が同時に商品經濟それ自体の内的な自己發展の過程として現われる」という珍奇な主張をしておられるにすぎません。ここでは「商品經濟それ自体の」構造としては、古代商業のそれであれ、中世社会のそれであれ、はたまた資本主義社会と社会主義社会との間のそれであれ、決して本質的な差異がないことが忘れられております。商品經濟は、共同体と共同体との間に發生するという事実がしめすように、それが媒介する社会の生産力や生産關係によってその「内的」構造を規制されないという点にこそ、その特殊な本質的性格があり、またこのような特殊な商品經濟による社会的再生産過程の全面的包摂として資本主義社会は形成されるがゆえに、ここにこの社会形態を完全に排棄しうるいわば原理的根柢が存在する——これが宇野教授の商品經濟と資本主義との關連についての把握の核心だったはずです。このような宇野理論の——そして私は、マルクス理論の、とって誤りないと思いますが——A・B・Cさえも理解しえずに、宇野理論の「内在的

批判」とその「克服」とを呼号する第二の立場なるものを、私はマルクス経済学における正当な一つの立場として認めることはできません。

原理論を「純粋な資本主義」の内部構造として把握する第一の立場はもとより、これをいわゆる単純商品生産社会から資本主義社会へ、さらに競争をとおして独占へという、一種の歴史的過程の理論的把握として処理しようとする第三の立場にしても、それらはもともと『資本論』で提示された方法の純化、理論的整理の結果として主張されたものです。いうまでもなく私はこの第三の立場を、結論的には科学的な主張として認めるわけにはいきませんが、少なくともこのような主張を発生させる敘述なり、考え方なりが、マルクス自身にあったことは否定できません。私たちは、そのような考え方が、一方における、資本主義の純粋な発展過程を前提として、「資本家の生産様式の内的構造」を「その観念的平均において敘述する」『資本論』の方法と背馳し、かつ後者の方法によらないかぎり、『資本論』を統一的理論体系として完成することができないと考えるがゆえに、原理論の方法としては否定されねばならないと主張するのです。第三の立場にたつ論者は、これと逆に、前者を『資本論』の基本方法として理解し、後者の考え方を否定しようとしているのでしよう。そうならば、おのおのの方法によって、資本主義の理論的解明と、それにもとづくその歴史過程の科学的整理とをあらためて提出しなくてはならない。私は後者の立場にたつて、宇野教授はその『経済原論』と『経済政策論』とにおいて基本的にこの課題をといたものとし、前者の考え方に立つ諸論作の理論的欠陥をあきらかにしたのです。その点は伊藤氏も、「説得力にとんでいる」として評価されています。だが以上の観点からすると、私には伊藤氏のいわゆる「第二」の立場なるものを、『資本論』の展開の学問的継承として、したがってマルクス経済学の一つの立場として認めることはどうしてもできません。それはたかだか基本的には宇野理論を承認しながら、しかもそれが論理と歴史との統一を破るものであり、ひいては理論と実践との統一を否定するものである、とするおなじみの公式主義的論難におびえて、「第三」の立場との折衷をはかるうとしたはかない企てで

しかなかったのではないか。「世界市場的過程は、旧社会関係とあらたな生産力との対立関係を、商品経済自体の内的対立——価値と使用価値との対立関係——に転化する」という岩田氏の観念的図式は、この主張の折衷主義的欠陥と非科学性とをあますところなく暴露しています。イギリスにおける旧社会の生産関係と生産力とは、ヨーロッパ大陸、アメリカ、アジアなどの各国におけるそれらとは、異った対立関係をもっていたはずです。そうでなければ同じ「世界市場的過程」に媒介されながら、何故スペイン、ポルトガル、オランダではなく、あるいはまたドイツ、フランスではなく、イギリスにのみ典型的な資本主義の発生、確立の過程がみられたか、という点は全く不可解になるでしょう。「世界市場」——でもいわゆる「局地的市場」でも同じことでしょうが——における「商品経済自体の内的対立」から、旧社会の崩壊と資本主義の発生過程とをとりてみせてくれないかぎり——おそらくそれはキリスト神話における処女懐胎を科学的に解明するのに匹敵する困難な事業と思われませんが——、私たちはこの「第二」の立場なるものを真面目な科学的主張としてうけとることはできないのです。しかもごていねいに、岩田氏は「商品経済自体の内的対立関係」を「価値と使用価値との対立関係」と説明してくれています。「価値と使用価値との対立関係」なら、古代社会の商品であれ、社会主義社会に残存する商品であれ、およそ商品であるかぎり、その内部に維持せざるをえない「対立関係」でしょう。その「対立関係」がそれ自身でどうして「資本主義的生産を形成」することになるのか。いやその「対立関係」には、すでに旧社会における生産力と生産関係の矛盾が「転化し、集約」されているといわれるかもしれません。しかしそうすると、ひとくちに「商品経済自体の内的対立関係」といっても、かかる「商品経済」の媒介する社会関係の相違によって、この「対立関係」自体に質的差異があることになる。はたして商品のもつ価値と使用価値との対立自身に、このような歴史過程を規制する具体的内容がふくまれているかどうか。これはたんにそう宣言されただけでは、実際に論証していただかないかぎり、何人も納得できるものではありません。そういう大事業は「第二」の立場の方々の今

後の御努力にまつとして、ここでは、そのような商品ないし商品経済のとらえ方はすでにマルクスの商品経済の理解とは根本的に異質なものであることだけを明言しておけばたりと思います。あまりにも有名なので、引用するのもしささか気がひけるのですが、念のためマルクスの言葉をひいておきましょう。

「商業は、当面する生産組織——その形態のあらゆる相違にもかかわらず主として使用価値をめざすような生産組織——にたいし、いたるところで多かれ少なかれ分解的な影響をおよぼす。だが、どの程度まで商業が旧生産様式の分解を生ぜしめるかは、さしあたり生産様式の堅固さと内的編制とに依存する。また、この分解過程がどんな結果を生じるか、すなわち、どんな新たな生産様式が旧生産様式の代りに現われるかは、商業にではなく、旧生産様式そのものの性格に依存する。古代世界では、商業の影響および商人資本の発展はつねに奴隷経済に結果する。また出発点次第では、直接的生活維持手段の生産をめざす家父長的奴隷制度が、剰余価値の生産をめざすそれに転化するにすぎない。ところが近代世界では、それが資本家の生産様式に結果する。この点から、これらの結果そのものは、なお、商業資本の発展とは全く別の事情によって条件づけられていた、ということになる。」（『資本論』青木文庫版、(9)471～2頁）

もっともわが伊藤氏は、岩田氏のような暴論を主張されているのではありません。氏が以上のような岩田式商品論を「説得力にとんでいる」として承認されているのかどうかは、知るよしもありませんが、先にみたように、氏は「……原理論の展開は資本主義の生成、発展、成熟の三段階を、それぞれおなじようなみで基礎としうるものではありえない」とされつつも「原理的展開が、はたして商品経済と資本主義的生産の世界史的な存在の順序なり、資本主義的生産の世界史的発展、成熟の過程を考慮することなく……無理なく体系的におこなわれうるかどうか」疑惑におちいられていたのです。ここでは原理論が「資本主義の生成、発展、成熟の三段階を、それぞれおなじような意味で基礎としうるものではありえない」とすれば、どのようなち

がった「意味で基礎としうるもの」なのか、あるいは、はたしてこの三段階をちがった「意味」においても「基礎としうるもの」なのかどうか、氏の明確なお考えをおききたいのですが、氏はそれ以上何ものべておられません。短い書評文にそれまでのぞむのは無理というものでしょうが、私としては、もしも氏が資本主義の「生成」の過程を、岩田氏の御託宣のように、「商品経済自体の内的対立関係」の理論的把握の「基礎」としておられるのであれば、それでは原理論全体はいうに及ばず、その冒頭の商品においてさえも「理論的規定の意味するものが不明確となるおそれがないかどうかは、なお問題としてのこるであろう。」といわざるをえないのです。

3

伊藤氏のように、原理論が「歴史過程からあらかじめ抽出想定された純粋資本主義のみを対象として」構成されたというのは、宇野教授の原理論に対してはだいぶ不正確ないい方であり、正しくは、資本主義の典型的な歴史的発展過程を対象として、この発展傾向に即して純粋な資本主義の理論的想定がなされ、原理論が構成された、とすべきだということはまえにのべましたが、このような原理論によって、かえって「理論的規定のいみするものが不明確となるおそれ」が生ずる拙著における実例として、氏は、「貨幣の資本への転化」の問題と、「それ自身に利子を生むものとしての資本」と「株式資本」の問題の二つをあげておられます。

この第一の問題をめぐる、氏もふれておられるように、拙著での所説に対して、宇野教授から反批判があたえられており、さらに最近私がまたこの教授の所説に対して疑問を提示しております。（『世界貨幣』と『資本の商人資本的形式』——宇野弘蔵教授の所説にたいして——、『北大経済学研究』第16巻第1号所収）したがってまだ問題は係争中であるという意味で、ここでの検討はさしひかえたいと思います。

そこで第二の問題について。伊藤氏は次のようにいわれます。やや長くならしますが、行論の関係から全文引用しておきます。

「純粋資本主義を終始対象とする本書の立場からすると、株式会社制度ないし株式資本の規定は、『異質な』範疇として、原理論から排除される方向が示されることとなる。著者は、宇野教授の展開について、商人資本形式の『例解』として古代中世の商人資本があげられるように、株式会社制度も、『それ自身に利子を生むものとしての資本』のたんなる『例解』として、指摘するにとどめるべきだった、とものべている。しかし、本来、十九世紀末の『大不況』をつらぬく資本主義の世界史的成熟過程は、その生成過程とことなり、資本主義の商品経済とそこに包摂された生産力の高度化過程にたいする、他の社会関係なり上部構造との関連を積極的動因として生じたとはいいきれない性質をもっていた。とすれば、資本主義的生産にもとづかない商品経済にも存在する商人資本形式を理論的に規定する場合と、株式資本を理論的に展開する場合とは、簡単に類比しえないのであって、後者については、資本主義的生産の展開をとおしてその成熟期に産業資本の商品化の完成される歴史過程が、ヨリ実質的に考慮されてよいのではなかろうか。すくなくとも、株式資本の原理的規定の排除する方向を示すことにより、本書が、『それ自身に利子を生むものとしての資本』の展開契機なり、原理的体系の終結規定としてのその意義を、従来の説明にたいし、積極的に明示したとはいえないであろう。株式資本の展開をめぐる鈴木教授、さらにさかのぼって宇野教授の所説にたいする本書の反論は、なお問題を今後へのこしてあり、十分な説得力を欠くところがあると思われる。」

ここではいろいろな問題が、意識的にか無意識的にか未整理のまま一括されて、私への反論のために動員されております。

第一に、氏が「株式資本の展開をめぐる鈴木教授、さらにさかのぼって宇野教授の所説」といわれるとき、ひとはあたかも「株式資本の展開をめぐる」鈴木教授の主張が、「宇野教授の所説」の延長線上に位置づけられるか、あるいは少なくとも基本構造においては同一の性格のものであるかのごとき錯覚におちいるでしょう。しかしじつは鈴木教授の主張は、「宇野教授の所説」の全面的否定を意図してなされたものなのです。伊藤氏のいわれるよ

うに、鈴木教授は、「株式資本」の「理論的展開」においては「資本主義的生産の発展をとおしてその成熟期に産業資本の商品化の完成される歴史過程が、ヨリ実質的に考慮され」るべきだとしているのです。それに対して宇野教授は、株式資本についてこうのべておられます。「……産業資本も株式形態をもって形成され、その運営によってえられる利潤が、株式に対して配当として分与されることになると、資本は、この配当を利子として資本還元される擬制資本を基準として、商品化されて売買されることになる。……株式その他の有価証券の売買市場は、資金が商品化されて売買される貨幣市場に対して、資本市場をなすわけである。それは貨幣市場の利率の形成に直接に参加するわけではないが、その利率を反映する利率によって資本還元される擬制資本の市場として、いわばその補助市場を形成するものに発展しうることになる。しかしそれと同時に、この資本市場に投ぜられる資金は、もはや一般的には産業資本の遊休貨幣資本の資金化したものとはいえなくなる。それは土地の購入と同様に、投機的利得と共に利子所得をうるための投資として、原理論で解明しえないヨリ具体的な諸関係を前提とし、展開するものとなるのである。」この点をさらに具体的にこうもいっておられます。

「産業における株式会社制度の普及は、固定資本の巨大化を前提として、いわゆる金融資本の時代を展開することになるのであって、原理論だけでは究明しえない諸現象を呈することになる。株式会社の資本についていえば、必ず一般の普通株主資本家と会社の支配権を握る大株主資本家とを分離し、前者はむしろ利子所得者化し、後者がそれに対応して他人資本をも自己資本と同様に支配する資本家となり、いずれも原理的には規定しえない、種々なる具体的な、いわば型的規定を与えるよりほかない、諸関係を展開する。この諸関係をも原理的に規定しようとする、本来の原理的規定は与ええなくなる。いいかえれば金融資本の規定は、原理論の資本規定を前提として始めて与えられるのであって、これを原理的に規定しようとする、資本自身の規定をも曖昧にすると同時に、金融資本としての規定も与ええなくなる。あるいはまた原理論の一般的な資本の規定を金融資本と共に段階論的に規定せらるべき

産業資本と同一視することになる。」(『経済原論』岩波全書版, 220～1頁)

ここでは宇野教授は、原理論においては「資本主義的生産の発展をとおしてその成熟期に産業資本の商品化の完成される歴史過程」などを「ヨリ実質的に考慮」してはならないことを主張しておられることは、伊藤氏といえどもおわかりにならないはずはないと思います。そしてまた教授のこの主張に真っ向から反対し、「十九世紀末の『大不況』をつうずる資本主義の世界史的成熟過程」という「原理論で解明しえないヨリ具体的な諸関係を前提とし」、「金融資本の規定」を「原理的に規定しよう」としたのが、まさに鈴木教授の「所説」であったということも。もし宇野教授と鈴木教授の「株式資本の原理的规定」をめぐる対立を、以上のような基本的関係においてとらえられたならば、伊藤氏は、まず私の鈴木説批判の当否を、それ自体の論理的展開の検討をとおして判定されるべきであった。拙著における「株式資本の原理的规定」をめぐる論議のうち、宇野教授への疑問はいわばつけたりにすぎなく、その基本内容は副題にもしめしてあるとおり、鈴木教授の所説への批判であることは、誰が見ても一目瞭然でしょう。ところがこの点にかんしては、伊藤氏は「本来、十九世紀の『大不況』をつうずる資本主義の世界史的成熟過程は、その生成過程とことなり、資本主義的商品経済とそこに包摂された生産力の高度化過程にたいする、他の社会関係なり上部構造との関連を積極的動因として生じたとはいいきれない性質をもっていた。」というきわめて曖昧な主張で回避しるのです。それでは氏は「十九世紀末の『大不況』をつうずる資本主義の世界史的成熟過程」なるものは、「資本主義的商品経済とそこに包摂された生産力の高度化過程」との関連だけから「生じたといいきれ」とでも考えられるのでしょうか。まさかそうではありませんまい。「……積極的動因として生じたとはいいきれない」という氏の不安定な表現が、その点についての自信のなさをものがたっています。だがまだしも、このような不明確ないい方をされる点に、鈴木教授や、「さらにさかのぼって」岩田氏におけるごとき、歴史過程の形式的な一面化と機械的裁断とに対比して、氏にはマルクス経済学理解の健全性が残っているものとして評価

すべきかもしれません。

自由主義段階から帝国主義段階への歴史的発展経程が、「資本主義的商品経済とそこに包摂された生産力の高度化過程」との関係だけから「生じたとはいきれない性質をもっていた」のに対して、十九世紀中葉の自由主義段階におけるイギリス資本主義の発展過程は、「他の社会関係なり上部構造との関連」を自己自身の運動原理のうちに解消しつつ発展していくものとして、その基本的展開を「資本主義的商品経済とそこに包摂された生産力の高度化過程」だけから把握することができる。「いいきれ」る「性質」をもっていたのです。この点が宇野教授における、資本主義の発展段階を区分する基本的メルクマールになるわけですが、氏にあっては、このような資本主義の各発展段階のもつ基本的差異を無視しておいて、よくも資本主義の歴史的発展段階を規定しうるものと感心する以外にありません。

鈴木教授のような、自由主義段階だと帝国主義段階だとを問わず、資本主義の発展過程は理論的に「内面化」できるというような観念論的主張に対しては、各段階における資本主義の運動過程の差異が、かかる歴史過程の形式的同一化を拒否するものであること、つまりかかる歴史把握は、資本主義経済に対する自由主義と帝国主義のもつ根本的差異を無視するものであること、を説明しなければなりません。これらの点については拙著で詳しくのべましたので、これ以上くりかえす必要はないと思います。残念ながら伊藤氏の主張は、私の鈴木理論批判を対象として、その論理的不整合性や、歴史認識における欠陥を具体的に衝くものではなく、鈴木理論の要旨をくりかえされているにすぎないようにみうけられます。拙論における「十分な説得力を欠くところ」を具体的に指摘していただかないと、鈴木教授や宇野教授の見解とは違いがある——批判論文ですから違いがあるのはあたりまえです——から、「なお問題を今後へのこして」いるといわれただけでは、たんなる書評としてもそれこそ「十分な説得力を欠く」ように思われるのです。

さて次に第二の問題として、宇野教授の所説にたいする私の疑問点についてのべておきましょう。教授はその『経済原論』第三編分配論の終章「利

子」，第三節において「それ自身に利子を生むものとしての資本」をとり扱っておられます。（その点では『資本論』も『経済原論』も、伊藤氏のいわれるように、これを「原理的体系の終結規定」としているわけではなく、ともに「諸階級」あるいは「資本主義社会の階級性」をそれにあてています。そして私も「原理的体系の終結規定」はそうでなくてはならないと考えます。）そしてさきにふれたように「株式会社は実際には個別資本にとって過大の資金を要する大事業に採用せられる方法であって、産業には資本主義の発展段階の寧ろ末期に普及するので」あり、この「株式会社制度が資本主義の発達に具体的に如何なる歴史的意義を有するかは、資本主義の世界史的発展段階論で明らかにさるべき問題である。」（『経済原論』下巻、290～1頁）として明確に原理論におけるその取り扱いを排除しておられます。しかしそうだとしたら、他方で教授が説明しておられるように、「所謂資本の所有と経営の分離」とか、「所謂創業利得」とかを原理論で扱うことはできないはずで。それゆえ私は株式資本は、「それ自身に利子を生むものとしての資本」の規定の具体的な例解以上の位置を与えられるべきではないと考えるのです。だがこの点は『新原論』（岩波全書版『経済原論』）では、よほど改善されているのではないのでしょうか。そこでは「それ自身に利子を生むものとしての資本」の基本性格があきらかにされたうえで——いうまでもないことですが、この「それ自身に利子を生むものとしての資本」は、宇野教授にあっては、直接に株式資本をさすものではありません。「利潤の利子と企業者利得とへの分化」によって媒介された、商業資本あるいは産業資本自身の自己を処理する観念形態なのです。——、この「資本家的観念」が「その社会的基礎を与えられ、資本自身を商品化する新たなる形態規定」として、「株式形態」がとかれ、しかもそれは直ちに「原理論で説明しえないヨリ具体的な諸関係を前提とし、展開するものとなる」（『新原論』219～20頁）とされているのです。いいかえれば「それ自身に利子を生むものとしての資本」の「社会的基礎」をもった具体的存在として「株式形態」がのべられると同時に、その原理論からの排除が主張されているのです。『新原論』では

このような『旧原論』でのよけいな規定や曖昧な点はすっかり払拭されて、「株式形態」の原理論でのとり扱いはよほど明確になったとはいえないでしょうか。そしてこれならば、私のいう「株式会社」ないし「株式資本」は、「それ自身に利子を生むものとしての資本」の例解としての位置を与えられるべきだ、とする主張と殆んど違わないことにはならないでしょうか。この点でも、伊藤氏が具体的に、私の所説と宇野教授の『新原論』の当該箇所とを読みくらべて下さったら、私と教授の見解の差異にかんするかぎり「なお問題を今後へのこしておる」とは、いいえなかったのではないかと思われます。教授と私のいずれも、株式資本は「原理論で説明しえないより具体的な諸問題を前提とし、展開するものとなる」という結論では一致し、そしてまたこの点において鈴木教授の所説と決定的に対立しているのです。くりかえしになりますが、問題の基本的性格からいえば、伊藤氏は、私と宇野教授の所説の差異にふれられるまえに、まず鈴木教授と宇野教授の所説において根本的対立があることを明らかに意識されるべきであった。そしてその何れをとられるかを自己自身に明確にされたうえで、私と宇野教授の所説の差異に關説されるべきであった、と思うのです。いずれにしても「株式資本の展開をめぐる鈴木教授、さらにさかのぼって宇野教授の所説に対する本書の反論」といういい方は、そのような意味で、「本書の反論」の具体的内容を知らない読者には大きな誤解を与えかねない記述ではないでしょうか。

私の主張における欠陥は、具体的には以上の「貨幣の資本への転化」にかんする部分と「株式資本」の処理にかんする部分との二つしかあげておられません。両方とも宇野教授あるいは鈴木教授の所説と異なるがゆえに、「なお検討の要する問題ののこされていることが、そこに示唆されている」とか、あるいは「なお問題を今後に残しており、十分な説得力を欠く」とかいわれるだけで、そこには宇野教授あるいは鈴木教授の権威にすぎた評者の裁断は読みとれても、評者自身の私の論理への具体的批判は提示されていないのを遺憾に思うのです。

さてここでいささかわき道にそれますが、伊藤氏の帰依しておられると思

われる、原理論を「資本主義の世界史的展開過程そのものを対象として、その基本的運動原理を抽出することにより構成」という方法にかんして、その具体化としての鈴木教授の『経済学原理論』に例をとって少しふれておきます。その三篇構成は、タイトルが少し異なるだけで、宇野教授の流通論、生産論、分配論という編成と同じです。ところが、その第三篇、第二章の第二節では、景気循環の過程を「資本主義的蓄積の現実的過程」として説明しながら、第三節「資本主義的生産の運動法則」では「かくして、資本主義的生産は、産業循環の過程によりその生産力の周期的な破壊と周期的な高度化とを強制されつつ、ついには生産力と生産関係の矛盾をこのようなかたちでは解決しえない段階にまで生産力の発展をおしすすめることになる。」

(同上書454頁)として、最終章「利潤の利子化」において産業資本の株式会社化の必然性をとくのですね。ここではたしかに、「資本主義の世界史的展開過程」を対象として、その「基本的運動原理」が抽出されているようにみられます。しかし第二篇「資本主義的生産」においては、「資本の蓄積過程」として、資本蓄積のタイプの交替による完全な社会的再生産過程の資本による支配がとかれているだけです。いったいこの筆者は、資本論体系における「資本の生産過程」論と、「資本主義的生産の総過程」論との関連をどう考えておられるのでしょうか。前者では自由主義段階を「基礎」とし、後者では帝国主義段階あるいはそれへの移行過程を「基礎」とするとも考えておられるのでしょうか。もしこの編者が、この『原理論』を、『資本論』を継承しつつより科学的に純化再構成したとでも信じておられるならば、その第一巻第三篇以下および第二巻で資本と労働との基本的関係をあきらかにし、第三巻はそれを基礎として、それに全体的に制約されつつ展開される資本と資本との、あるいは土地所有との具体的関係をあきらかにするという、『資本論』の体系的構成の意義が、まったくおわりになっていなかったということだけは明言できると思います。価値法則の論証や、平均利潤の法則をあきらかにする場合には、資本主義的生産様式を、生産力と生産関係の矛盾をそれ自身で解決しつつ発展する「自立的な社会生産体」——これが伊藤

氏の拒否される「純粋な資本主義」ということにほかなりませんが——であるとし、「株式資本」をとくときには、資本主義は「もはや利潤率の均等化と資本主義的生産の全体的編成とを現実的には実現しえない」（同上書 455頁）として、そのときどきの都合によって、資本主義的生産様式を、「自立」的としたり、非「自立」的としたりしながら論理を操作するというのは、噺としては面白いが、資本主義の原理の「無理なく体系的」な論証としてはいかがなものでしょうか。伊藤氏は、この場合には「それによって理論的規定のいみするものが不明確となるおそれがないかどうか」疑問とは感じられなかったでしょうか。

以上で、やや立入りすぎたかとも思いますが、伊藤氏の拙著に対する批評へのお答えは終ることにします。

4

なお書評への反論という範囲からはみでますが、本稿の主題につらなるものとして、ついでに鈴木理論批判と関連した一つの労作への感想を付言しておきます。柴垣和夫氏の「資本主義の『世界性』と『国民性』——帝国主義論の方法・覚え書——」（『思想』第499号所収）についてです。

柴垣氏の岩田氏への批判は基本的には正しいと思います。（ただこれにも若干の疑問はあります。たとえば氏が岩田氏の「株式資本」論を批判するさいに、「『資本の商品化』と『株式資本』とは、じつは概念的に同一の次元で等置しえない性格のものというべきであろう。」（同上書 16頁）とされている点です。「資本の商品化」と「株式資本」とを「概念的に」異なったものとするというのはいささか苦しい。「資本の商品化」は「株式資本」形態による以外にはないからです。ここはじつは、宇野教授のいわゆる「それ自身に利子を生むものとしての資本」と、「資本の商品化」あるいは「株式資本」とが「概念的に同一の次元で等置しえない性格のもの」とであるとして、原理論では前者を理論的にあきらかにすべきであって、後者についてはふれたとしてもその例解にとどめるべきだといわれた方がよくなかったかと思う

のです。したがって私は、柴垣氏が岩田氏にしたがって、宇野教授の「株式資本」の説明の訂正をみとめておられるのは無用の修正と思います。これはしかしここでは枝葉の問題にすぎません。

しかし岩田氏の資本主義の「世界性」についての主張に対して、柴垣氏が積極的にその「国民性」を対置して批判しておられる部分は同意しがたい。岩田式「世界資本主義」論に対して、柴垣氏は「資本主義の『国民性』が経済的根拠をもって形成される根拠」について次のようにのべておられます。

「労働力もそれが商品として売買され取引されるかぎりには、その市場を、つまり労働力市場を形成しなければならないが、それは、労働力なる商品が、さまざまな歴史的・文化的・人種的特殊性を刻印された人間の人格と結びついた存在であり、したがってその他の商品や貨幣のごとく資本が必要におうじて自由に生産したり移動させたりしえない存在であるがゆえに、地域的にかぎられた限界のうちでしか形成されなかったこと、これである。」(同上書20頁)

これは宇野教授によって明確にされた、資本主義の根本矛盾としての「労働力の商品化」の把握にもとづいて、資本主義の「国民性」、つまりその意味での資本主義の「歴史的限界」を労働力商品の「歴史的限界」によって説明しようとしたものと考えられます。しかしこれは奇妙な議論のように思います。資本主義社会はいうまでもなく、資本が社会的生産過程を支配することによって確立する社会であり、そういうものとして資本が主体性をもっています。もちろん資本の支配といっても、それは絶対的なものではなく、人間の歴史における特殊な一定の段階における支配にすぎません。具体的には、それが確立してからせいぜい百数十年を経過したにすぎず、しかも部分的には半世紀も前からその支配は廃絶されつつあります。そして資本主義社会自体の内部においても、それは本来社会の存続の基礎をなす生産過程の主体的要因としての労働力を商品化することによってのみ成立しようという点に根本的な制約を課されております。物として生産されることのできない労働力を、あたかも物としてくりかえしくりかえし商品化しなければならないとい

う点に、この生産様式のアキレス腱が存在します。

だがこのことは柴垣氏が主張されるように、労働力のにない手としての労働者が「さまざまな歴史的・文化的・人種的特殊性を刻印され」ており、したがってかかる労働力は、資本の要求にとって「地域的にかぎられた限界のうちでしか形成されえない」という意味での「歴史的限界」として理解されるべきではありません。たしかにかかる労働者の性格は、資本にとって労働力を支配するための一定の歴史的制限を課するものであることは否定できませんが、いかに「さまざまな歴史的・文化的・人種的特殊性を刻印され」ていたとしても、いわゆる二重の意味で自由な労働者が与えられるかぎり——そしてかかる労働者が創出されないかぎり、もともと資本主義自体が成立しえませんが——、資本はこれを自己の価値増殖の根拠として支配し、かつ資本にとって必要なかぎりにおいて、かかる「特殊性」を消去して近代的労働者へと陶冶し、またその「地域的にかぎられた限界」を次第に打破してゆくものなのです。さらに労働者には国籍はあっても、資本には国籍がない。それはもともと世界貨幣を出発点として自己増殖する価値の運動体にすぎないものだからです。すなわちマニフェストはいう。「ブルジョアジーは、世界市場の開発をつうじて、あらゆる国々の生産と消費とをコスモポリティッシュなものにした。」

もっともこのことからただちに、現実の資本主義を「世界市場に登場する諸国民や諸民族の種々雑多な生産をその有機的一環とするような統一的な世界市場的過程としてのみ存在し、またそのようなものとして世界資本主義をなしている。」と思ひこむのも少しばかり軽卒のそしりをまぬかれません。以上の資本主義の性格は、十七世紀頃から開始された資本主義の発生期および発展期におけるその展開の基本的側面を、その歴史的傾向にそくして抽出したものにすぎません。十九世紀末からの資本主義の変質過程を前提とすれば、資本主義の現実の発展をかかる性格においてのみ把握することは一面的にすぎないということは——少なくとも抽象化された理論を形式的に固持することによって、生きた現実の具体的認識を拒否するという観念論的立場にた

ないかぎり——誰の目にもあきらかなこととなるのですが、すでに自由主義段階においても現実の資本主義は、一方においてかかる「コスモポリティッシュ」な性格を展開しつつも——それが自由主義ということの意味でしょう——、具体的にはイギリス資本主義あるいはドイツ資本主義、フランス資本主義などとしてしか存在しえなかったのです。大体近代国家の成立は、資本主義の発生、確立の過程と歩みをともし、資本主義は、封建的地域社会を破壊しつつそれを近代的統一国家に鑄なおし、かかる近代国家の対立・抗争のうちにこの段階の世界史の基本的動向を決定したというのは、およそ初等歴史学の常識にぞくすることがらでしょう。岩田氏の「コスモポリティッシュ」な夢想を批判するために、柴垣氏は、この近代国家形成の「根拠」を、労働力商品の特殊性にもとめたわけですが、これもちょうど岩田氏との対極において、資本主義の基本的性格を見誤ったものであるということは、以上の説明を念頭においていただければそう無理なく了解していただけたと思います。

結論的にいえばこうです。資本主義の発生・発展の歴史過程におけるその「コスモポリティッシュ」な性格にあらわされるところの、その自立的運動過程の展開にそくして、資本主義の原理的把握はなされる。しかしこれは現実の資本主義が「世界資本主義」としてしか成立しえないことを証明するものでもなければ、逆に、その原理的な労働力商品のもつ矛盾によって「一国資本主義」の必然性をあきらかにするものでもない。マルクスがその経済学研究のはじめにおいて、例の国家、国際貿易、世界市場をふくむプランをつくりながら、その完成としての『資本論』においては、あらゆる上部構造的規制を捨象した、経済過程の純粋な自立的運動を「資本」の体系的理論構成のうちにあきらかにせざるをえなかったことからもしめされるように、資本主義の本質把握は、国家や国際関係をぬきにしておこなわれなければならない。これは同時に、資本主義社会が、現実には資本主義国家としての近代国家の成立、発展のうちにその歴史的展開をたどるのは何故かという問題にたいしては、原理論は直接解答を与うるものではないことをしめしているの

です。

かかる課題は、原理論を前提として、資本主義の歴史的発展段階論によって答えられねばならない。すなわち絶対主義国家の成立とその崩壊は、資本主義の重商主義段階論との対応において、近代代議制国家の成立は、自由主義段階論との関連において、さらに帝国主義国の植民地支配をめぐる対立抗争の過程は、帝国主義段階論との関係において、とかれねばならない。そして、それぞれの近代資本主義国家が、いかなる根拠によって、一定の時期に一定のテリトリーにおいて成立、発展せざるをえないかは、それぞれ旧社会の崩壊の過程をうけつぎながら、世界的な資本主義化の中においてしめるその独自の位置と意義とを具体的に確定する作業をとおしてしか、あきらかにされうるものではないということになります。

以上きわめてあたりまえのことに落つきましたが、このあたりまえのことが、意外に忘れされ、資本主義の理論的、歴史的把握について、次つぎと奇想天外の新理論が提唱され、しかもそれらが大抵宇野理論の「批判」と「克服」あるいはその「継承」の名のもとに主張されているところをみると、宇野教授がくりかえされた論点を、さらにくりかえすという、私たちの「第一」の立場なるものも、そう不生産的なものとはいえないように思われるのです。わが学会の水準においては、宇野理論の「克服」はもとより、その「継承」、ときによってはその「擁護」さえなお困難な状態であり、むしろまだその正当な咀嚼と吸収こそが必要とされる段階なのではないか。これはおこがましくも、拙著において、宇野理論の「継承と発展」といた、私のわれとわが身に対する自戒の言葉でもあります。

(引用文のうち引用頁数をつけなかったものは、すべて伊藤氏の書評か拙著から引用ないし再引用したものです。)